



序 文

阿波学会会長 石 井 愼 義

ご承知の通り、佐那河内村は名東郡みょうとうに属し、1郡1村である。「名東」の呼び名は、明治の初年には現徳島県全域と淡路島、さらに一時は香川県までをも含む地域に対して使われたが、平安時代に「名西みょうざい」に対比して使われたのが最初という。江戸時代までは多くの地域が「名東」に属していたが、明治以後、徳島市が独立、さらに昭和後半までに次々と各地域が徳島市に編入された後に、佐那河内村だけが残った。古くからの所属地名がこれだけ続いているというのは、何故なのか。独自性の表れなのか、守旧性の結果に過ぎないのか、単なる偶然なのか。

一方、佐那河内村からは古い峠越えの道が各地に通じており、藩政時代には、中心地の徳島に近い交通の要衝にあった。このようなことは、地域にどのような影響を与えてきたのか。

地形は、山というか丘陵というか、傾斜地が多い。評価の高い「佐那河内米」の産地とはいえ、水田を含む田畑の耕作には向いていない。したがって、果樹園芸が産業の中心であったこともあろう。一頃はミカンの産地として収入も多かったようで、私が徳島に来る直前、今から30年以上も昔になるが、1世帯当たりの保有自動車台数が多い村として有名だったようで、そうした記事を読んだ記憶がある。その後、ミカン栽培が隆盛という時期は過ぎた。山林は人手が非常に多く加わっているが、かといって林業が盛んであったということもないようである。今の土地利用はどうなっているのだろうか。

徳島県では、この地域に「ネイチャーセンター」を開設し、その自然環境を、環境学習等に役立てようとしており、その成果は挙がりつつある。また、徳島県内では初の本格的風力発電施設も設置され、実験的運用が行われている。将来に向けて先駆的な、このような施設が設置できたというのも、自然環境が十分に残されていたからであり、県内の人口の最大集中地、徳島市の隣にありながら、その理由は何か、非常に興味深い。

22班、167名の参加を得て行われた今回の調査の結果が、この紀要に示されている。どのようなことが明らかにされたのか、熟読して頂きたい。

今回の総合学術調査に当たって、村当局、村民の方々、など多くの関係者からご協力、ご支援を頂いたことにここで感謝したい。これらの調査結果が、村の更なる発展に資することを期待している。我々調査に当たった者も、今回得られた結果が今後どう変化して行くか、を注意して見て行きたい。